

「Z会の映像」 教材見本

こちらの見本は、実際のテキストから1回分を抜き出したものです。

ご受講いただいた際には、郵送にて、冊子をお届けします。
※実際の教材は、問題冊子と解説冊子に分かれています。

教材見本内の「添削課題」は、演習問題として扱っており、
添削指導はおこなっていません。ご了承ください。

次の文章は、菊を愛する姫君が、貴公子の姿をとった菊の精の訪問をうけるという物語の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

今は悩ましくならせ給へば、乳母いかにと悲しみて、母上に此の由申しければ、中納言殿も騒ぎ給ひて、色／＼にいたはり給へども、^アそのしるしこそなかりけれ。乳母、かななぎの方へ行きて、「御年十五にならせ給ふ姫君の、長月晦日の酉の刻ばかりより、いたはりつかせ給へるは、いかゞ候べきぞ。^{かんが}勘へて給ひ候へ」と聞えしかば、神主申しけるは、「何ともはかりがたき御占^{うら}にて候。^イもしたゞならぬ御身にてやおはすらん。いかさまにも危き御占にて候なり」とありしかば、乳母不思議の思ひをなし、急ぎ歸りて、母上にかくと申されければ、北の御方仰せけるは、「みづからもさやうに見なしてありしかども、さやうのことは乳母なん知らではよもあらじと思ひはんべれば、^ウ言ひ出でんもさすがにて候なり。もし又いかなることにかありけん、^エよくすかして問ひ給へ」とのたまひければ、乳母対の屋に参りて姫君の御側近く参りて、聞ゆるやうは、「御姿を見るに、たゞならぬ御有様とおぼえて候ぞや。^オみづからに何をかつ、ませ給ふべき。御心の内を知らさせ給へかし」と、こまぐとさ、やきけ

れば、姫君おほしめしけるやうは、^カとても忍びはつべきことならねば、語らばやとおほしめし、恥づかしながら、始めより終りのことども、残りなく聞えければ、^キ乳母浅ましく思ひける。乳母北の御方へ参りて、ありのまゝに申せば、中納言殿もきこしめし、「^クたくひなく浅ましきかな、内参りのことをこそ明け暮れ思ひしに、さてのみやまん本意なさま」とて、うち過ぎさせ給ふ。

（「かざしの姫君」）

〔注〕 ○かんなぎ——^{かんなぎ}巫覡。神に仕え、祈禱して神託を告げる人。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・エ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「言ひ出でんもさすがにて候なり」（傍線部ウ）とはどういうことか、人間関係がわかるように説明せよ。
- (三) 「とても忍びはつべきことならねば」（傍線部カ）とはどういうことか、わかりやすく説明せよ。
- (四) 「乳母浅ましく思ひける」（傍線部キ）とあるが、乳母はなぜそのように思ったのか、わかりやすく説明せよ。
- (五) 「たくひなく浅ましきかな」（傍線部ク）とはどのような気持ちか、またそれはなぜか、説明せよ。

（各14 cm × 1行）

（14 cm × 2行）

（14 cm × 2行）

（14 cm × 1行）

（14 cm × 2行）

出典：（作者未詳）『かざしの姫君』／ オリジナル問題

現代語訳

こうして（姫君は）気分がすぐれないようにおなりあそばしたので、乳母はどうしたことかと悲しんで、（姫君の）母上にこの（姫の不例の）ことを御報告申し上げたところ、（それを聞いて母上だけでなく父の）中納言さまも動揺なさって、あれこれと御介抱になるのだが、その効き目もないのだった。（そこで困った）乳母は、神に仕える祈禱師のところへ行つて、「（今年で）お年が十五歳になりあそばすおひいさまが、九月の三十日（＝陰暦では秋の終り……菊の季節の終り）の日暮れごろから、御様子がお変わりあそばしたのは、いったいどういうことでしょうか。どうぞ占ってくださいまし」と申し上げたところ、祈禱師が申したことには、「何とも判断のしにくい占い（の結果）でございます。もしや（その姫君は）ふつうではないおからだ（＝御懐妊）になつておいでなのではなかるうか。どう見ても心配な御託宣（が出ているの）でございます」と（いう説明が）あつたので、乳母は思いがけない感じがして、急いで帰つて、（姫君の）母上にこのように（御託宣が出ました）と申し上げなされたところ、奥方さまがおっしゃったことには、「わたくしもそのように（姫が身ごもっているのではないかと）見受けていたのですが、そういうことは乳母（であるおまえ）が気がつかずにはまさかないだろうと思つておりましたので、（先を越してわたくしの口から）言い出すようなことも、なんといつてもやはり（姫の養育を任せたまえに対して差し出がましいか）と思つて（ためらつて）いたのです。それにしても（姫が身ごもるとは）どういうことだったのでしょうか、（相手は誰なのか）うまくその気にさせて聞き出してくださいよ」とおっしゃつたので、乳母は（姫君の暮らす）対の屋に参つて姫君のお側近くに아가つて、申し上げることに、「おひいさまの）お姿を見ますと、（赤ちゃんを身ごもったせいで）ふつうではない御体調と見受けられますわよ。このばあやにいったい何をお隠しあそばすことがございませうか（いいえ、何もお隠しにならなくてもよろしゅうございますのよ）。お心のうち（にあること）を（このばあやにだけは）お漏らしあそ

ばしませ」と、細やかに（あれこれなだめすかすように）ささやいたところ、姫君が思いあそばしたことには、（自分が身重になってしまつては）とても隠しおさせることはできないのだから、話し（てしまい）たいとお思いあそばして、恥ずかしく思いながらも、（菊の精との間柄の）始めから終わりまでの事々を、残らず申し上げたところ、乳母は心底おどろいたことであつた。（事情がわかつた）乳母が奥方さま（のところ）へ参つて、ありのままに御報告したところ、（父の）中納言さまも（それを）お耳になさつて、「何に比べようもないほど情けないことだ、（姫の）入内のことはかりをこれまでずっと願つてきたのに、（姫が懐妊したとあつては、姫の入内が不可能になつた）このままで終わってしまうばかりであるような（ことでは何とも）残念なことよ」と（お歎きになつたが、もうどうしようもなく）て、（そのまま日々を）うち過ごさせなざる（のであつた）。

解答

(一) ア〓周囲の人々の介抱の効きめもなかつた。

イ〓もしや姫君は御懐妊になつておられるのかもしれない。

エ〓うまく話す気にさせて懐妊の事情を聞き出してください。

オ〓私には何もお隠しにならなくてもよいのですよ。

(二) 姫君の母は娘の懐妊に気付いていたが、娘の後見役である乳母からの報告を待つていたということ。

(三) 親にも乳母にも内緒で貴公子と密会していたのを隠し通すことはできないと姫君が考えたということ。

(四) 自分の知らないうちに姫君が男を通わせていたと聞いたから。

(五) 中納言は娘を入内させる心算だったので、娘が隠れて恋人を通わせていたのをこのうえなく残念に思う気持ち。